
IS（インフィニット・ストラatos）“銃神が垣間見る未来（さき）”

銀花

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
インフィニット・ストラトス
IS “銃神が垣間見る未来”

【Zコード】

Z6737Q

【作者名】

銀花

【あらすじ】

”天才”が舞台を整え、”白騎士”が脚本し、”革新者”が踊るその場所で見守る存在が一つ。それは”正史”では登場し得なかつた筈のイレギュラー。そして、その存在が登場したことにより、その物語は”正史”の流れから外れ”外史”へと至る。そんな存在が登場する物語は一体どのように歴史を刻むのか。そしてその存在が垣間見る未来に何を見出すのか

0・舞台裏。始まりの泣き声（前書き）

この作品は原作「*INS*」^{インフィニシィ・ストラタス}の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

0・舞台裏。始まりの泣き声

ある国に一人の少女が住んでいた。
その少女は天才であり、たった個人一人の力で世界の情勢を大きく変えた。

ある国に一人の少年が住んでいた。
その少年は天才であり、天才故に大半の事では満足する事は出来ず、無謀にもその少年ある世界の情勢を一人で変えた、少女の要塞と言つて差し支えない居城へ電子が駆け巡る戦争　　電腦戦を仕掛けた。

結果は　　惜敗。

誰一人、國家一つを用いてでも破れなかつたその牙城を、少年はただ一人だけで半分以上を切り崩すことに成功。最終的には防がれる結果となつてしまつたが、それでも少年はそれだけのことを成し遂げる。

その事に若干の悔しさを感じつつも、少年は今まで得られなかつた快感に満足していた。
だが、少女は違つた。

少女自身、自分の事は”天才”だと理解していた。勿論、それ故に自身が”異質”である事にも。

それに、少女は他にも認められる”天才”だ。

世界一の頭脳といつても過言ではない知識を有する少女。それは世界すらもその少女の前では膝を曲げ、屈服した。

そんな少女に、智が力である電腦戦を仕掛け、あまつさえ少女が形成する十あるプロテクトを全て破り、少女自身が相対しなければ

危うくハッキングが可能であった少年にどうして興味が沸かないことがあるつか。

すぐさま少女は逆探知を掛け、少年の居場所をハッキングする。あれほどの知識や腕を持つのだから、それこそ米のペントゴンやFBI、それからCIA、独のBKA、仏のジャンダルムリなどのような特殊機関に属していると予想していたが、少女の予想は大いに裏切られる結果となる。

数あるプロテクトをやや強引に突破し、少年本体を叩き、得られた情報。

それは自身の祖国、それも少女が現在住んでいる場所の近くからアクセスされていたというものだつた。

少女は爛々と瞳を輝かせながら、滅多に出ない自分の部屋を飛び出し、その少年が住まう場所へと向かう。

少女の家族が何事かと様子を見に来るが今はそれに構っている余裕など少女には存在しなかつた。

数少ない”天才”である故に”異質”である少女が興味を持つことが出来た、肉親でも親友でも幼馴染でも妹でもない、完全なる他人の少年の元へと。

インフィニット・ストラトス
IS。

それはただ一人の天才が製作した、各国の軍事戦力、そして世界情勢を大きく変えた兵器の名称。

宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツであり、総機体数は現在世界が”認識している範囲”では467機。ISは核となる「ア」と腕や脚などの部分的な装甲であるISAマーから形成されており、その攻撃力、防御力、機動力は非常に高い”究極の機動兵器”。特に防御機能は突出して優れており、シー

ルドエネルギーによるバリアーや”絶対防御”などによつてあらゆる攻撃に対処でき、操縦者が生命の危機にさらされることは”殆ど”ない。

また、HSには武器を量子化させて保存できる特殊なデータ領域があり、操縦者の意志で自由に保存してある武器を呼び出せる。さらに、ハイパー・センサーの採用によつて、コンピューターよりも早く思考と判断ができる、実行へと移せる。

その中でも際立つのがHSは自己進化の設定。戦闘経験を含む全ての経験を蓄積することで、HS自らが自身の形状や性能を大きく変化させる”形態移行”を行い、より進化した状態になる。また、コアの深層には独自の意識があるとされていて、操縦時間に比例してHS自身が操縦者の特性を理解し、操縦者がよりHSの性能を引き出せるようになる。

だがHSには謎が多く、その全容は明らかにされていない。特に心臓部であるコアの情報は自己進化の設定以外は一切開示されておらず、完全なブラックボックスとなつていて。また、原因は不明であるがHSは女性にしか動かせないとされている。

「 通信？ それも通常回線じゃなくて秘匿回線の方ねエ……」

俺は一瞬だけ思考し、すぐにその通信に手を付ける。

この秘匿回線を知つていてる存在は極めて少数。その内の殆どが俺自身知り合いで認識しているのが多数だ。云わば、秘匿回線というよりプライベート回線と言つた方が正しいかもしけない。

欠伸一つ打ちながら俺はその回線を開いた。

今では珍しい音声のみの回線。別に通信画面式の奴を使用しても良いのだが、こちらの方が趣きを感じられる。

『 こちら ”無所属” 。応答を願つ』
ノバディ

『 はあ……、お前は変わらないな』

『その顔……”白騎士”か?』

約一年ぶり、とまでは行かない。声を聞いたのは数カ月ぶりという位。その声を聞いた時には実際に顔も見ている。
それでもそれなりに久しく感じられるのは、俺が過去に日常がそれだけ波乱に満ちたものだからだらう。

『その名前で私を呼ぶなとあれほど言つてるだらう?』

『と、言われてもねエ。通信傍受を警戒してるんで本名を出すのはマズいだらう? 俺もお前も世間様にや知られるのは体裁が悪いんだから』

『私は特に問題ないがな……』

『俺はあるんだよ、”白騎士”。それにこいつなつたのも全てお前が俺に押し付けたんだらうが』

『…………すまない』

『別に気にしてないからいいけどよ。んで? 俺に何か用事か? 珍しくこの回線を使って連絡を入れてくるところを見るに』

少し言い過ぎたか。通信越しでもあいつが少し気落ちしているのが手に取るように感じられた。

だが、俺が行つたことは何一つ間違つていない。俺がこんな生活をしているのも全てあいつが俺にその役目を押し付けたから。だが、その役目をアーケードしたのも俺自身。どちらも悪く、そしてどちらも悪くない。

『……タイムアップだ。とうとう世界はもう一度革新を迎える』

『ほつ……? ということは』

『ああ。今日現在を以てお前はEIS学園に入学して貰い、そして

』

『”革新者”の護衛つてワケだな? そして全ての汚れ役、”革新

者”を守る為の生贊となれつてことだ』

俺はその回線を繋ぎながら立ちあがつた。

時は満ちた。十年前のあの日から始まつた、天才と優しい姉と、そして絶望した少年が描いた終着点。

手に掲げられる金色の縁を持つ、漆黒の十字架。

「起きろ アストラナガン」

その十字架の正体は本来男性には扱えない筈の兵器

インフィニシット・ストラトス
IS。

『……大丈夫か?』

『当たり前だ。俺を誰だと思つていやがる』

マルチフォーム・スーシが刹那の間に俺を覆う。その光景を傍から見ればまるで変身物のヒーローのよう。

漆黒の身体に金色の装飾が所々に入り、一番目に入るのが金色の翼。天使のような悪魔のような、幻想的な美しさがそこにはあつた。宇宙空間での活動を目的としているため、ISは空を飛翔する事が出来る。

つまり

『さて、空の旅へと赴きますかッ！ 受け入れ態勢はすべて任せても大丈夫だよな?』

『滯りなく終了している。お前は”革新者”が女子高の中に男子一人が混ざるのは些か可哀想という理由で無理矢理編入させられたという名目だ』

『ISはどうする?』

『……隠れていたが、”革新者”が世間に注目されたから表に出てきたという処で大丈夫だろう』

『一寸無茶ぶりじやねエか?』

『大丈夫だろ。出来るだけ I.S 学園の情報は外に洩れないようにしているからな。その為にあそこには”更識”がいるんだ。お前も現当主とは顔見知りだつたろ?』

『認めたくはないが、一応は顔見知りだ』

『含むところがあるようだが今は無視しておく。なら大丈夫だろ。『無所属』の情報はこの国でも機密、というより、正確な情報を持つてゐる国家はないだろからな』

『OK。なら早速そつちに行くかツ!』

漆黒の機体は金色の羽を羽ばたかせ空へと浮かぶ。

高度は凡そ二千メートル。常人なら呼吸はあるか、余りの高さに足が竦むだろが、俺には関係ない。空気の方は I.S が保護してくれ酸素の問題はなく、高度の方も幾千幾万と I.S 訓練により乗りこなし、とつの昔にそのような恐怖は消え去つた。

身体を地上と水平になるように傾け、そのまま翼に装着された推進ブースターを吹かせ、一気に初速から最大側まで引き上げる。

「世界は動く。それが是か否かを取るかは未だ解らず。だが、それでも確かに世界は動く」

そして俺は紺碧あおを司る空の海を超え、”天才”が舞台を整え、”白騎士”が脚本し、”革新者”が踊るその場所へと飛び立つた。

0・舞台裏。始まりの泣き声（後書き）

初めましての方は初めまして、知っている方はこんにちわ。駄文作者の銀花です。

遂にやつてしまつた……。orz

ちょっと息抜き気分で執筆していたら、いつのまにか投稿していた。まあこちらはサブ扱いとし、メインはもう一作品となるので、更新速度が遅くてもとやかく言わないと幸いです。

さて、ここからは小説内の解説。

主人公機体の名前が“アストラナガン”となつていますが、これは稚拙な説明によりただの“アストラナガン”ではないことがわかります。

そう、これこそがスパロボで最強クラスの能力値を持ちながらも、ドット絵のせいでゴキブリゴキブリと嘲笑されていた機体“ディス・アストラナガン”なんです！

ナ　ナンダッテー！！

当初は同じスパロボ作品の主人公機体“ヴァイサー・ガ”でもしようかと思いましたが、如何せん一夏の“白式”と似通い過ぎているので断念。ならばISがここまで有名になる前々から考えていたストフリでも使おうかと思いましたが、まあ皆一緒のことを考えてるよねということで断念。

どうしようか迷いに迷い、“アストラナガン”を使うことまでは決めたのですが、イマイチピンと来ない。ならば、と思い“アストラナガン”を一段階変化。これにより至ったのが“ディス・アストラナガン”なんです。

だつてあれですよ。ドット絵は「キブリつぽいけど、等身大にした
らカッコイイですし、近接武装が鎌ですよ？ 滅茶苦茶浪漫溢れる
武器じゃないですか。これ以外選択肢はないでしょ？

そんなこんなで始まつた今作品。

進行速度は亀ですが、末長く見守り読まれることを願つています。

1・HIS学園（前書き）

この作品は原作「*インフィニシティ・ストラタス*」^{インフィニシティ・ストラタス}の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

IS学園。

それはアラスカ条約に基づいて日本に設置された、IS操縦者育成用の特殊国立高等学校の名称。

基本的にISの操縦者育成を目的とされており、その運営及び資金調達は原則として日本国が行う義務を負う。ただし、当機関で得られた技術などは協定参加国の共有財産とされ”原則”公開する義務があり、また黙秘、隠匿を行う権利は”日本国”にはない。

また当機関内におけるいかなる問題にも日本国は攻勢に加入し、協定参加国全体が理解出来る解決をすることを義務付ける。

また入学に際しては協定参加国の国籍を持つ者には無条件に門とを開き、また日本国での生活を保護すること。

俺は手に持つ辞書相当の分厚い本を閉じ、やや自身の意訳を含んだ解釈を頭の中で転がしていた。

「つまりは『日本人のせいで世界情勢が狂つたじゃねーか。どうにかしろよ黄色い猿共。あ？ 学校作つて人材育成と管理やれ。あとその技術プリーズ。金は出さんからな』ってことだろ？ よくこれだけの啖呵を吐けたもんだよな。下手すればその軍事力を以て滅ぼされる可能性もあつたって言つのによ」

それは当時の外交官がへっぴり腰だったのが問題だつたんだろうな。

後、ISの情報が殆ど機密状態のせいで、ISが世界に爆発的に広まつた”白騎士事件”の実績を以てしてでも強気には出られなかつたんだろう。下手に強気に出で相手を不快にさせ、それでいてアテにしようとしていたISは動きませんでしたつて展開になつたら

田も当てられねエし。

そんな一介の学生が考えるモノでもない思考を展開させながら、俺は呑氣に腕時計を見やる。

現時刻は8：30分。そして俺の現在の立場は学生。普通の学生ならば遅刻に相当する時間だ。勿論、俺の学園の登校時間は他書の学校よりも遅い なんてことはなく、歴れっきとして遅刻だ。

ふう、と息を零しながら俺は外の景色を見る。

都市から幾ほどか離れた場所に建設された、要塞に似た建物。周りを高い塀で囲い、常時侵入者が居ないか警備員が見回り、赤外線カメラによる防止、監視カメラは常時三人態勢で二十四時間勤務。そんな建物が俺の目的地であり、そして世界各国からある一つ兵器を操る為だけに送りだされた子供達の育成機関。

俺はその門を潜り抜け、目的地である教室へと急ぐ。

本来ならば、その学園は美女の園。男子が一切立ち入り禁止である筈の聖域に俺は臆することなく踏み込んだ。

「全員揃つて……ませんねえ。遅刻でしょか？ 事故とかにあつてないといいんですけど」
「ふん、どうせアソツのことだ。寝坊かそこらへんだろ？」「あれ。織斑先生、遅刻している生徒の事知ってるんですか？」
「まあな。あれは幼い頃からの馴染みだ」
「ふえ？、そうなんですか」
「どうより山田君も知つていたような 」

ザワザワとした話し声が教室の扉越しに届く。

流石の俺もこの空氣の中を突貫する勇氣は湧いてこない。周りの

目線何か基本的に無視する俺だが、じつじつに關してだけは別物だ。

さて、どうしたものか。もつと騒がしかつたりすれば何の問題もなく混ざつていけるのだが

「お前は初日からなにを遅刻しとるんだ」

「うげっ！ まさか俺んとこの担当教師は千さんかよ……。ツイでねエな、俺」

トホホとした気分で俺は三ヶ月ぶりの邂逅を果たした。

眼の前の出来る女という風貌をした女性は幼い頃からの馴染みの人物。そして世界的にも有名な人物。名前は織斑千冬、通称千さんだ。

手にした出席簿で俺の頭を叩く。すぐに手を出すといひは全く変わつていないようだ。

「さつさと教室に入れ、この馬鹿。どれだけの生徒達がお前を待つていたと思っているんだ」

「……俺なんか無視してさつさと授業に入ってくれてよかつたものを。変なところで律儀なのも変わんねエのな」

「ふん、これが普通だ、普通。お前が少し大雑把すぎるんだよ」

「そうかア？ これでも一般男子生徒と自覚してるんだがな」

「お前のどこか一般なんだ つと、いつまでもじつしるワケにもいかんな。ほれ、さつさと入つて自分の席に付け。一夏を

頼むぞ」

「はいはいっと。

了解

俺は耳元で呴かれた言葉に律儀に反し、その扉を潜り抜ける。

すると目に入る女、女、女。女子高だからこれで当たり前の光景に辟易としながら、当初の目的である人物が眼に入った。

織斑一夏。唯一”女性だけが操る事の出来る”ISを動かした”男性”。

世界各国から今一番注目を受けているであろう存在。それが俺の目的の人物であり、俺が護衛する対象。

さあ、コイツがどれだけ面白い存在なのか。

約束通り、俺は全力で守る。だが、面白くない存在であれば守るという意思も御座なりになつてしまふのは人間だから仕方がないことだ。

反面、もしもコイツが俺に”本気”で守らせるといつナーナー力があるのなら、その時は俺も全身全霊で守つてやる。

それが俺の生き

「つて、ええええええええっ！？ ももも、もしかしてあーちゃん！？」

「誰だよ、折角俺が自分の生き様を回想してゐつて言つのこつて、まー姉か？」

そこには懐かしい顔があつた。先ほどの千さん以上の昔の馴染み。俺が幼い頃に出逢つた少女は、今では一介の女性……とは言い難いが、それでも確かに成長した姿がそこにはあつた。

「タクツ。いつまでそうやつて突つ立つてゐつもりだ、御堂。山田君も公私は区別してくれ」
「す、すみませんっ！」
「あいよー、つと」

流石に千さんも怒り始める頃だから真面目モードにチョンジ。にしてもここにまー姉がいるとは思わなんだ。最近じや丸つきり会わなくなつてたからな。最後に会つたのは……確かまー姉が日本

代表候補生になる前だつたはず。日本代表候補生に選ばれてからは訓練何かで俺が住んでた場所には来れなくなつたし。まあ俺もその頃から日本に留まつてることが少なくなつたのも原因か。

そんなことを考えながら俺は自分の席へと移動する。周りからの視線を感じつつも何でもないかのように振舞い、自身の席へと着くことに成功。その横には

「よ、良かつた。俺以外の男がいて、本当に良かつたつ！ あ、俺は織斑一夏な、よろしく。お前は？」

「俺は御堂秋人。気軽に秋人でも呼んでくれ、一夏」

「おう。よろしくな、秋人！」

「「」」

どうしてかいきなりの友情の芽生え。

自己判断では自分の事を社交的だと思つてはいるが、まさかここまで初対面の人間に気軽に話しかけられるとは。

流石は千さんの弟ということかな？ 千さんと同じで心に一本の芯を持つてゐる雰囲気だし。嫌う要素は未だない。

「そこ… 静かにしろ！」

「「」」

俺はあつちやーと仰々しく掌をデコに乗せ天を仰いだ。

「織斑先生と呼べ」

そう言いながらお得意の出席簿アタックが炸裂。

後は簡単に予想できるように周りの生徒が一夏と千さんの関係を声高に聞きまくり、結局一夏と千さんの姉弟説が判明。

騒然とするクラスの生徒達に千さんの一喝の声。そして静まる生

徒達。

予想しやすい光景、ありがとうございました。でももう少し捻らないと飽きが来るもんなんだがねエ。

「さあ、S.H.I.E.L.D.は終わりだ。諸君らにはこれからI.S.の基礎知識を半月で覚えてもらつ。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませる。いいか、いいなら返事をしろ、よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

……どこの鬼教官だ？ といつより、千さんはここをどこの軍隊施設と勘違いしてねエか？

確かに特殊的な軍事施設かもしけないが、そのノリが通用するのは軍隊だけだ。ここにいる人間はI.S.を扱うことのできるただ的一般人に過ぎない。それなのにこんなスバルタのような教育内容とは。いやはや流石は千さん。俺達に出来ない事を平然とやってのけるツ。そこにシビれる！ あこがれるウ！

「それから、そこでそわそわとしている山田君も私事は放課後に行つてくれ」
「は、はいっ！」

そう言えばまー姉と全く会話出来なかつたな。
あの様子を見れば思いつきり氣になつてることは丸わかりだけど。
まあ適当に煙に巻くとしよう。
流石に“眞実”を話すのは駄目だろ。あの人は昔から表情に出る
ドジつ娘だつたし、こんな“黒い眞実”を知るには優し過ぎる。
まあそこがまー姉の良い所かもしだねエけどな。

一話題にして早速のアンケート実施（笑）

内容は至って単純。誰をヒロインにするかというものです。ということでお下記の中から一人を選んでくれると幸いです。

?シャールことシャールロット・デュノア

?まー姉こと山田 真耶

?生徒会長こと更識 楠無

?天才こと篠ノ之 束

……ふむ。各地で見られるヒロインの内、まあよく見かけられるのが一人で、もう一人は作者自身の趣味丸出しつてのが良く解る構図ですね（笑）

あのヒロインは一夏のハーレムパーティーってことで。シャルもどうしようか悩んだんですが、一応こっちに入れたかった。会長は別に持つてきても問題ないよね？ まー姉と束さんに関しては既にフラグが立つてる匂いもしますが、そこは眼を瞑つてスルーということで。

特に締め切りなどは設けてないので、気軽に書いてください。ついでに感想も書いてくれると感謝感激です。

どうせヒロイン決めるって言つても、最終的くつ付くだけであってハーレム（偽）を形成するのでしょうか。

2・授業風景（前書き）

この作品は原作「*IS*」^{インフィニシィ・ストラトス}の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

物凄い空気が悪い。

いや、具体的に言えば空気が悪いというより、ピリピリとした緊張感がこの教室を覆つてしているのだ。

現在、このクラスには28名の女子と本来ここには居得ない筈の男子が2名。内、ニュースにより世界的に有名になってしまった男子が一人。言わずもがな、一夏の事だ。

俺に向けられる好奇の目線もあるはあるが、やはり一夏に比べればマシというモノ。

一夏本人はそんな視線に慣れ親しんでいないのか、そわそわしたりキヨロキヨロしたりと若干の拳動不審。

世界情勢が変化して早十年。

現代の戦闘兵器、つまりは大型戦艦や戦車などはタダの鉄屑へと成り果て、世界の軍事バランスは崩壊し、それと同時に世界情勢も崩壊したのだ。

その切欠を作り出したのがただ一人の天才。その天才が属していた国が、ここ日本国。

後は誰にでも想像出来る通り、諸外国等がそれに危機感を覚え、そして生みだした協定 通称“アラスカ条約”を採択されたのだ。

結局、この世界情勢の変化により、ISという個人戦略級兵器を動かせる女性が偉いという公式は簡単に成り立ち、そうして女尊男卑の社会構成が完成するというワケだ。

「虚像しか与えられていなければ、その虚像を与えられている人間からしてみれば実像に変わりないってワケか」

ふとそんな呟きを零してしまったが、騒がしい教室内では誰一人としてその言葉は拾えない。それは隣に座る一夏にさえ、だ。

ただ、一夏は先ほどから気になる物を見つけたのか、視線を横に泳がせている。

そして漸く決断したのか、チャイムが鳴る五分ほど前、一夏は席を立つ。視線の先にいる人物は篠ノ之束の妹である、篠ノ之箒。確かに一夏とは幼馴染という間柄だったはず。

これは懐かしの再開というものだろうか。

いいねエ、そういう青春は大好物だよ？

道行く通路はモーゼの十戒の如く両断され、ここにいる全員の視線を真っ向から浴びていた。

それにも、さつきまでの視線は駄目なのに、こういう時の視線は大丈夫つてどこか可笑しくねエか？

そういうしている内に教室から一人は姿を消す。

つまり、教室に残る特異点は俺ただ一人だけ。若干居心地悪く感じるも、それは彼女達が悪いワケではないので、何も気にしていいかのようには振舞つておく。

あまりそういうのを表情に出してしまつと無暗に彼女達を傷つける結果となるからな。そういうとこ、ちゃんと俺は考へてるのよ？だから話しかけたいけど話しかけられない。話しかけて欲しいけどどんなことを話せばいいから黙目つ！ みたいな視線を寄せされてもドッシリと座つておくのさ。

「 であるからして、IPSの基本的な運用は現時点での国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIPS運用をした場合は、刑法によつて罰せられ 」

勝手知つたるIISの運用方法の注意やその他諸々。

年単位でIISを動かしている俺にとって、既にこのような講義は意味を為さない。というより、俺の場合、先ほどのまー姉が述べた殆どの項目を“既に破つている”のだから。

そんなことをツラツラと考えながら、ふと隣から呻き声のようなモノが聞こえてくる。

少しだけ驚きつつもその発生源を確認。間違いなく、その呻き声は一課から発せられていた。

「……どうかしたのか？ 額に皺を寄せてウンウン唸るなんぞ」

「……全く理解出来ねえ」

「……はア？ これって入学前に参考書の内容だろ？ あれって確か必読じゃなかつたのか？」

「……古い電話帳と間違えて捨てた」

「ワロス」

ボソボソ声で話す声は、まー姉以外の声が聞こえない教室内では意外と聞こえるモノだ。

それを目敏く発見するまー姉は、まあ声を掛けるわな。一度氣になつたら梃子でも動かない性格だし。

「織村くん、何かわからな」ところがありますか？」

大きな双丘を揺らしながら胸を張るまー姉。

外見だけを見てとれば頼りになりそうなお姉さんなのが、中身を知つてはいる俺にとつては不安で一杯だ。

そんな姿に眼を輝かせる一夏を見て、俺は内心ほくそ笑んだ。これは面白いことになりそうだ。

「……おい、一夏」

「……どうかしたのか？」

「……わからないんならさっさと言つた方が良くなエか？ 嫌でもお前は目立つ存在だ。最初から出来ないことは出来ないって言つていた方が後々になって困るよりマシだと俺は愚考するぜ。言つだら？ 聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥つて」

「……そうだな」

俺の言葉で決心がついたのか、一度顔を俯かせ、次に顔を上げた時には決意に秘めた瞳をしていた。

計画通り。

「先生！」

「はい、織斑くん！」

「ほとんど全部わかりません！」

「ブフツ！ ちょ、真面目にウケル！」

最早完全にネタとしか言えないモノを一夏は堂々と宣言した。

「え……。ぜ、全部、ですか……？」

引き攣る笑顔。流石に優しさとお節介の塊であるまー姉でもフオローを入れることは難しかったか。

周りのクラスメイトも唖然とした表情で一課を見つめ、姉である千さんも呆れた眼で見つめていた。

そんなクラスの雰囲気に一課は戸惑いを覚えつつも、目線だけで俺に助けを求めてくる。

「（タステケ……）」

「（ムリダ）」

俺は無情にもそんな宣告を下す。

「……織斑、入学前の参考書を呼んだか?
古い電話帳と間違えて捨てました」

無駄に清々しい様が好感的だ。俺限定だが。

「必読と書いてあつただろうが馬鹿者」

パシンと氣持ちいい音が教室内に鳴り響く。

それにもあれほどどの分厚さを持つ参考書を普通電話帳と間違えるか? 電話帳つてもつとコンパクトだと俺は思うんだが。

しかもあの参考書つて表紙にデカデカと必読の文字が記載されて気が……

「一夏、お前はどこのまでドジっ子なんだ? まー姉と同クラスだぞ?」

「あとで再発行してやるから一週間以内で覚えろ。御堂はその補助だ。もし一週間以内で覚えきれていなければ、二人共々罰則を与える」

「はアつ! ? 僕全く関係ねエじやんつ! 横暴だ! 」

「五月蠅い、黙つていろ」

「酷エ……」

俺は何も悪くないのに……

「い、いや、一週間での分厚さはちょっと……。あと秋人は関係ない気が」

「だからこそ、だ。お前のせいで他の人間に迷惑がかかるかもしれないからお前も俄然とやる気が出るだろう? 万が一達成出来なく

「でもいい。でも恨まれるのはお前自身だからな。頑張りずっとこのままひりひりしてはいけない。」

「やれば結構、やらいともひひは害はなく、そちらに害しかない。」
「どうワケだな？」

「アーティストだ。いいな？」

「……はい。やつもす」

一夏のしょんぼりとした表情に周りの女生徒は小さい声ながらも
黄色い悲鳴を上げている。

これはあれか。母性本能が揺さぶられるといつものなのだわうか。男の俺にはよく解らんな。

別にモテたいと思つてゐるワケじゃないから別にどうだつていん
だが。

「そうしょげるなつて！」
一週間もあれば俺がバツチリ教えてやつ
から

「マジか!? 流石は秋人、心の友よつ!」「任せとけ、マイブランザー!」

ガシツと腕を交わす俺達は、まるで今日知り合つたばかりだとは到底思えない程の息の合い方だ。

「はあ……。山田君、アイツらは放つておいて授業を続けてくれ」「ええと……、いいんですか?」

「 おお、どうせ

俺と一課が意気投合して居た瞬間、頭上から激しい衝突音と、その音に約り合づけの衝撃が訪れた。

「ここ」で俺から豆知識を一つ。頭を叩かれると脳細胞が死滅し馬鹿になるとよく言われるが、あれは嘘だ。

頭を叩くだけで脳細胞が死ぬのなら、ボクサー や K-1 選手など全員即死レベルになつてしまつ。故に、頭をいくら叩かれようと馬鹿になる事はない。まあそれも限度があるけどな。

「 こいつすれば大人しくなる」

「あはは……」

だが、それは馬鹿にならないだけで痛みは当然発せられる。

恨みがましい視線を千さんに送つてみるが、まるで堪えた様子はない。流石は冷血女とまで呼ばれる存在だ。

そんなどからこいつまで経つても彼氏が出来ないんだよ……

「御堂？ 言いたい」とあるなりの場でハツキリと言ふ、ハツ

キリと

「……何でもないでHす」

んな」と口に出したら間違いなく即行で死刑だらうよ。

流石の俺もそこまで馬鹿じやない。こいつのことは自身の胸の内だけにとどめておくのが一番。それが誰も害する事ない唯一の方法だからな。

2・授業風景（後書き）

ゆっくり投稿でよひやへ二話田。

まだまだ序盤も序盤なので戦闘シーンも皆無という現状。
かといって執筆速度を変えることも出来ないし、それよりもちょい
ちょいと忙しくなってきたしね。

誰だよ、オールでカラオケ行こうなんて言いだした馬鹿は。御蔭で
喉が痛い（泣

財布もすっからかんになるし、踏んだり蹴ったりだよ、本当。面白
かつたのは否定しないけどさ 』

3・邂逅（前書き）

この作品は原作「*IS*」^{インフィニシィ・ストラトス}の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

「ちょっと、よろしくて？」

あの悲劇の授業の後の休憩時間。俺と一夏は男同士の会話を楽しもうとして矢先に声を掛けられる。

一課は素つ頓狂な声を上げ、俺はその声を掛けってきた発生源の主に眼をやる。

その姿はまさに中世貴族を体現しており、透き通ったサファイアの瞳が一人を射抜かんと注視している。

金色の髪と自身を纏う”今時”の女性の雰囲気。男性をただの労働力としか見ていない、俺が毛嫌いする人間性を持った女性だった。その思想も今の世界情勢では仕方ないと言えるのだが、それでも俺は嫌いなのだ。

”虚”を”実”と信じ込んでいる”人間”は。

「訊いてます？ お返事は？」

「おい秋人。お前呼ばれてるぞ？」

「はあ？ 俺じゃなくて一夏の方だろ？ てか、俺はこんな貴族様みたいな知り合いはいねエし」

知り合いではないが情報としては知っている。

確かイギリスの代表”候補生”セシリア・オルコットだったか。ふむ、情報通りの人間だな。

ま、この歳でそこまでI.Sを動かせたら天狗にもなるわな。普通に考えたらエリート街道まつしぐらだし。ただ、天狗故の傲慢だからこそ成長は著しく悪くなる。

それは何故か？ 向上心というモノが無くなつていくからだ。下

手に候補生とまで選ばれてしまつたばかりに自分は最強なんだと誤解してしまい、そして勝手に自滅する。

よくあるパターン。ありふれた出来事。

「まあ！ なんですか、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というモノがあるんではないかしら？」

「ほら。言われるぞ、一夏」

「いやいや。どう考へてもあれは秋人の方だろ。だつて顔がお前の方に向いてるじゃん」

「ばつか。あれは恥ずかしくてお前の方に向きたくても向けないつていう乙女心の表れだろ？ もう少し女心を理解しろよ、一夏は」「わたくしは貴方達一人に話しかけているのですけど？」

ピキピキと額に青筋を立てながらも、捲し立てては自身が持つ矜持に反するのか、オルコットは無理矢理に自制していた。

しかし二人か。んなもん知るかと声高に叫びたい。せめて名前くらいは呼べ。でなけりや話しかけられてるのか全く理解出来ねエよ。そんな中、一夏は全く別の事を考へていたのか無関心そうに言葉を放つ。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

まあ急遽こんな場所に入学させられた一夏にとつてしてみれば、眼の前のオルコットはただ美人さんとしか認識できないだろう。

一夏にとつて、未だにエスとは馴染み深いものではない。本来ならば触れことすらあり得なかつた兵器だ。それを取り巻く環境すら興味持てる筈もない。どうして自身と全く関係ないものに興味を抱けようか。俺ならば絶対に無理だ。

だから一夏の言葉は正論のはず。だが、それすらも相手は気に入

らなかつたようだ。

「わたくしを知らない？ このセシリ亞・オルコットを？ イギリス代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」
「あ、質問いいか？」

愕然とした表情すらも一夏はスルーし、自身が疑問に思ったことを口にする。

……「イツは度胸があるのかないのか一体どっちなのか。てか、わつきの言葉を何事もなくスルーってどういう神経してんだ？」

「代表候補生って、何？」

「あ、あ、あ……」

「『あ』？」

「貴方つ、本気で仰つてますの！？」

「おう。知らん」

もう腹筋が崩壊しそうなんだが。

表情には出さないよう必死で抑え込んでもるけど、もうそろそろで限界に近い。なので、バレないように俺が補足を入れておく。

「代表候補生つてのは字面通り、国家代表IIS操縦者の候補生つなワケだ。所謂エリートって感じ」「成程、そう言われればそうだな」「てか一夏。お前つてテレビとか見ねエの？ 興味がなくてもそれなりの知識は入つて来るだろ」「ああ、俺つてテレビみない人間だから」「ふうん……」

完全にオルコットを除け者として一人だけ会話する。

だが、じばらぐ動きを停止させていたオルコットは復活し、声高に宣言した。

「そう！　Hリー卜なのですわ！」

……コイツはコイツで大丈夫なのだろうか？

ちょっと痛い子にしか見えないし、それよりも教室内の視線とか気にしないのか？　思いつきり睨みつけるとまではいかないが見られてるぞ。

絶対にコイツは知らずして敵を作るタイプだ。といつも、現在進行形を以て作ってるだろ。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくする事だけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「「そうか。それはラッキーだ」」

「……馬鹿にしていますの？」

いや、お前がそう言つたんじやん。

俺と一夏は『なあ？』と言つた風に顔を見合させる。別に俺達は間違つたことを言つた覚えはない筈だ。

「大体、貴方E.Sについて何も知らないくせに、よくこの学園に入学出来ましたね？」

「そりやそうだろ。今まで全くE.Sと関係ない生活を送つていたんだぞ？　それでどうやって知れと？　お前もしかして吃驚するほど馬鹿なのか？」

「なつ！？」

「男でE.Sに詳しい存在なんてE.Sに何らか関わってる奴らしかいねHよ。あとはテレビで取得出来る情報くらい持つてる程度。態々

自分達が使えない兵器をパソコンで調べるよつた酔狂な奴の方が少ない」

「おいおい……。そこまでにしどけつて。別に俺は気にしないんだから」

「……一夏がそつ言つんだつたらこじままでしどくか」

俺は若干不完全燃焼だが、当の本人がそつ言つてるのだから止めるのが手前。

まあ自分でも少し言い過ぎた気がしないでもない。ただ、久しぶりに友と言えそうな奴が悪魔痴を吐かれたんだ。これくらいは大目に見て欲しい。

だが、未だにブツブツと呟いてる奴が一人。

「わたくしが馬鹿？」このセシリ亞・オルコットが馬鹿？ そんな話あるわけないですわ。わたくしはエリートなのですよ？ そう、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリート――」

その言葉の内容を一夏は律儀に拾い上げる。

それが新たな火種となる事も知らないで。若干一夏は天然が入つてると思うんだが、どうだろ？

「入試つて、あれか？ ISを動かして戦うつてやつ」

「まア、オルコットの言葉をそのままとればそれ以外にありえないだろうな。確か一対一のガチンコ勝負だつたか？ 俺は受けてねエから知らねエけどよ」

「ん？ あれだつたら俺も倒したぞ、教官」

ピシッ、とまたもや教室内の空気は凍りついた。

唖然とするクラスメイト。目を大きく見開いたオルコット。どうかしたのかと言わんばかりに首を傾げる一夏。爆笑寸前で机に突つ

ふして耐え忍ぶ、俺。
改めて思うが混沌カオスだ。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

漸く復帰を果たしたオルコットは間違いであつてくれと願わんばかりの表情で一課に問いかける。

しかし、一夏はその間に無情な宣告を下した。

「女子だけではつてオチじゃないのか？」

「つ、つまり、わたくしだけではないと……？」

「もしかしたら倒した生徒全員にそんなことを伝えてるのかもな？」

「何で態々そんなことをするんだ？ 普通に言えばいいものを」「そうした方が伸びる可能性もあるし。いるだろ？ 褒めれば伸びる子つてのは。まあ反対に驕つて潰れる輩も出るだろ？ が、潰れる奴は所詮その程度だつたつてことで切り捨てられるだけだし」

どつちが正解なのかは俺にも判断は付かない。

大体、相手をした教官に持つ良さにバラつきがある筈だ。ここに I.S 学園の教師が相手をしたのならま一姉みたいな候補生クラスの教師も存在すれば無名の選手。果てには千さんが相手をしたつて可能性も無きにしも非ず。それで全てを全て同じ物差しで測るのは些か問題がある。

だが、オルコットも候補生の名を持つだけあつて他の生徒よりも S の操縦が優れていることも確かだらう。

「貴方！ 貴方も教官を倒したつて言つのー？」

「うん、まあ。多分」

「多分つて……。何か問題でもあつたのか？」

「まあちょっと」

そうした所で休憩時間の終了を告げるチャイムが鳴り響いた。

遠巻きに見物していた生徒たちは皆自身の席へと戻り始め、他クラスから噂の男子生徒を身に來ていた生徒達も戻つていく。

「ひ……！ また後で来ますわー 逃げないことねー よくつてー！
？」

そんな捨て台詞を吐き、オルコットも周囲と同時に早足で席へと戻る。

オルコットが席に付いたと同時に担当教師である千鶴と副担当のまー姉が教室の中に入つて來た。

「『逃げないことねー！』って一体何から逃げんだ？
「ああ……？」

小ちな疑問を感じつつも、俺達は千鶴に出席簿で叩かれないように口を開かずした。

3・邂逅（後書き）

一週間ぶりの投稿。

やつぱり一作同時連載は無茶でしかなかつたか……

一話書くのに結構時間喰うからあんまり余裕が出来ることが少ない。

ただでさえ積んでるゲームや小説を消化するのに時間が足りてない
つて言うのにorz

4・セシリア・オルゴット（前書き）

この作品は原作「*IS*」^{インフィニシ・ストラトス}の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

4・セシリ亞・オルコット

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

「この時間は先ほどまでの授業とは違い、まー姉の代わりに教壇には千さんが立っていた。

余程重要な内容なのか、まー姉も手にノートを抱え、真剣に千さんが振るう教鞭を聞き及んでいる。

しかし、ふと思いついたかのように千さんは一度授業を中断し、伝えるべき連絡を俺達に伝える。

「ああ、その前に再来週に行われるクラス対抗戦の出る代表者を決めないといけないな」

クラス対抗戦の代表者？ そんな疑問を胸に抱えているのが丸わかりの一夏。

さつきも言った通り、字面を見れば大体のことは理解出来るだろオが。そこそこには頭が回らないのか？

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

おつと、思つた以上に面倒な役職だな。

ざわめく教室は無視するが、果てさて一夏の方はどうだろうか。予想通り、自分には全く関係ないだろうと言つた風貌で楽にしてい

た。 じつは、この奴ほど面倒事に巻き込まれるんだがどうなることやら。 周りを見ればやはり視線が集まる俺と一夏。 多分だが、どちらかを推薦しようという魂胆なのだろう。

しかし甘いっ！

「俺は一夏を推薦するぜっ！」

「はいっ。 私も織斑くんを推薦しますー！」

「私もそれが良いと思いますー！」

フイツシユツ！ 俺の作戦通り、俺に向けられていた視線は俺の言葉により搔き消え、注目は全て一夏へと移った。

悪く思うなよ？ 俺もまだこんな場所で注目を集めのワケにはいかねエからな。 だが、困った事があつたら助けてやつから御相子にしてくれ。

……全部建前で、本音は面倒だから押し付けたとも取れるけどな！

しかし一夏の奴、全く動じてないな。 まさか「うー」とすり予測済みで、最早明鏡止水の極意に至つてているとか？

まさか、な。 自分の事だと思ってないとかじやねエだろ？ な？

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ？」

そして一夏は千さんの口から名前を呼ばれ、漸く自分が推薦された事に気が付いたようだ。

「お、俺！？」

俺はそんなおっちょこちょいな一夏に大丈夫の意味を込めて goog のサインを送つてみる。

……全く気休めにはならなかつたようだ。

「織斑。席に付け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？ いないなら無投票当選だぞ」

「ちよつ、ちよつと待つた！ 僕はそんなのやらな
「自薦他薦は問わないと言つた。他薦された者に拒否権などない。
選ばれた以上は覚悟をしろ」

「な、なら俺は秋人を推薦するつ！」

「ちよつ！ 一夏！ お前何やつてくれてんだよつ！」

「死なば諸共じやつ、秋人！ てーか、お前が最初に俺を推薦した
んじやねーかつ！ 詫び入れてキチンと働けつ！」

「あ～、御堂には既に委員会の仕事が割り当てられるから却下だ
え？」

「……織斑先生。俺、そんなことこれっぽっちも聞いてないんですけど？」

「今初めて伝えたからな。ちなみにこれも拒否権は存在しない」

「……」

「……頑張れ、秋人」

「……あア。頑張るぜ、俺」

一気に俺の中のテンションは激減する。

周りからの生温かい視線を受け、涙が零れそうだ。無駄に優しい
一夏の心遣いが直接響く。

そんな青春物語を演じてゐるなか、空気が読めないオルコットが
この空気を壊す。

「待つてください！ 納得いきませんわ！」

パシンと千さんの出席簿アタックには到底届かないが、それでも中々を音を立て席を立つ。

生徒たちの視線を一向に浴び、それでいて無謀にも千さんに反論する。ただ、千さんの方は歯牙にもかけないような表情をしていたが。

まー姉はそんな空氣にオロオロしながら、どうすれば收拾するのかを模索していたが時間切れ。オルコットの反論が始まった。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリニア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと仰るのですか！？」

「この日本国は基本的に多数決の原理の採用してゐるからな。クラスの大半が一夏を推薦してんだからお前は関係なくね？」

そんな無茶ぶりな反論に俺が反論を入れるが誰ひとりとして耳は貸さず、オルコットの論弁だけが教室内に響いた。

……寂しくなんてないやいつ。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までE.S技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ」

ブチッと俺の毛細血管が切れるような音が聞こえた。

同じように横の一夏は顔を引き攣らせ、千さんは無表情でオルコットを“睨みつけていた”。そりやそうだ。今挙げた三人は生糞の日本人。それをここまで侮辱されれば怒つて当然。

しかも千さんの場合はそれは一入だらうに。何たつて唯一無二の大切な家族。それをここまで侮辱されればキレるだらう。反対に千

さんがここまで侮辱されれば間違いなく一夏はキレる。出逢つてまだ数時間しか経っていないが、それくらいの人間性は十二分に理解出来る。

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

そしてそろそろ一夏の我慢は限界のようだ。
俺として自國にそれほど愛着心は持つていながら、それでも大切な人が住む国をここまで侮辱されれば勘に障る。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で」
「イギリスだつて大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

火山は噴火した。

そしてよく言つた、一夏。

「なつ……一夏？」

顔を真っ赤にしたオルコットは物凄い形相を以て一夏を睨みつける。

当の本人はしまつたと言わんばかりの顔をでそちらをそろそろと窺つていた。

そして尚も続くオルコットの剣幕。

「あつ、あつ、貴方ねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

だが、そろそろ俺も口を挟まして貰おうか。

「おいおい侮辱だつて？ 先に俺達の国を侮辱して来たのはそつち
じゃねエのか、ブリタニアン？」

「何か文句でもあるかしら！？」

「当たり前だ、時代遅れの偏屈者。まず第一に、このクラス内のど
こに猿なんている？ あア、顔を真っ赤にさせたお猿さんに近い女
生徒はいるか

「なつ」

最早絶句。

「一の句が継げないとこつ言葉はいつこつ時に使うのだらう。

「第一に、どうしてクラス一の実力者がお前なんだ？」

「そ、それは私がイギリス代表候補生であるから」

「そう。お前は未だイギリス“代表候補生”でしかない。それな
にどうして自身が最強という根拠はどこから来る？ 入試で唯一教
官を倒した？ それこそ一夏だつて倒したと言つている。その時点
で測れる実力はイーブン。それなのにどうしてお前は自分が一番だ
と言えるんだ？ 代表候補生に選ばれたからと言つて驕つたか？」

「お、おい秋人」

流石に可哀想になつたのか一夏がオルコットに助け舟を出すが、
俺は止めないし止まらない。

本当にストップがかかるのなら既に千さんが俺の口をふさいでい
るだろう。だが、その行動には未だ出られていない。つまりまだ言
つていいという証拠だ。

まあ千さんも少しキテいるのだらう。

「第三に、文化が後進的？ それこそ笑わせてくれる

「な、何が」

「その文化が後進的な国が造り上げた史上最強の兵器のお零れを貰つて いる国はどこのどいつだ？ 大体文化が後進的つて、日本ほどに独自の文化が長く続いている国なんかねエのにな」

そう。日本という国は長い歴史の中、一度もその歴史を、文化を途絶えさせたことのない唯一の国だ。

それは技術面からみれば遅れていた時期はあつた。しかし、現代で言えば反対にこの日本という国は技術の最先端を突っ走つている。それを最も的確に示すものこそが I.S. （インフラ・システムズ）

それを後進的だとは本当に笑わせてくれる。もう一度ちゃんと歴史の勉強をし直してこい。

俺の反論に返す言葉がないのか、オルコットは俯いたまま黙りこくっている。

勿論、それを行つた俺を避難するような視線はない。最初に口に出したのはあちらであり、それに対する反論を俺は行つただけだ。静まり返つた教室は、ただ空虚な空氣だけを残していた。

5・啖呵の切り合い（前書き）

この作品は原作「*IS*」^{インフィニシィ・ストラタス}の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

5・啖呵の切り合い

「決闘ですわ！」

憤慨するにばかりに怒りを顕わにするオルコットは最終的にその結論へと至る。

しかし決闘か。まさか容姿だけでなく、その中の精神構造も中世貴族のモノなのか。今時の人間が決闘なんて言つ言葉を使う所を滅多に目撃したことを俺はない。精々が一対一だとかその程度。

だが、ここで一つ問題がある。その決闘は一体誰に向けられて放された言葉なのか。

彼女が睨む眼光の先には俺と一夏の二人。元々喧嘩を売つてきたのはアチラであり、それを買つたのが一夏。そしてそれに逆襲したのが俺。

「」の中で一番怒りの矛先を向けられるのは一体誰か。まあ間違いなく俺だよな。

「おひ。いいぜ、四の五の言つよりわかりやすい」

「言つておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使いいえ、奴隸にしますわよ」

あれ？ 俺つて思いつきりハブられてるくね？

俺を除いた一夏とオルコットが互いにメンチを切り合つて。最早お互いに相手しか田に入つておらず、途中まで当事者であった筈の俺は途中退場の宣告らしい。

……何で？ 別に喧嘩を買つ気もこれっぽっちもなかつたけど、これはこれで寂しいんだけど。

そう思つて周りを見渡してみると、返つて来るのは不憫な子に対

する視線ばかり。

一応周りと俺の感性は同じのようだが、納得がいかない。

「悔るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない

「そう? 何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリ亞・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね!」

「ハンデはどのくらいつける?」

「あら、早速お願いかしら?」

「いや、俺がどのくらいハンデ付けたらいいかなーと

その瞬間、クラスは爆笑の渦に包まれる。勿論、その笑いの中には俺も含まれている。

その笑いに含まれる成分の大半が失笑や嘲笑の類。いくらISを動かせる唯一の男性だといっても、大半の人間からすればその程度止まりであり、代表候補生には勝てないと踏んでいるのだろう。

だが、俺の笑いにはそのようなモノは一切含まれていない。

純粹な哄笑^{ヒヨウジョウ}。腹を抱え、気を抜けば教室の床に笑い転げてしまい

そうなほどの大爆笑を俺はした。

「お、織斑くん、それ本氣で言つてるの?」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ?」

「織斑くんは、それは確かにIS使えるかもしけないけど、それは言い過ぎよ」

クラスメイトは口々に一夏を宥めようと/orする。

そもそもそうだ。現在の女子からの視点から顧みれば、男子などただの生殖器官程度の認識しかないのだろう。力? そんなもの、ISを動かせない時点で決定している。

事実、もし今から男女差別が起こりえようものなら数時間で男陣

嘗の拠点は潰されてしまつ。それほどエリは馬鹿げた戦闘力を有しているのだから。

「……じゃあ、ハンデはいい」

「ええ、そうでしょうでしょ。むしろ、わたくしがハンデを付けなくていいのか迷うくらいですか。ふふ、男が女より強いだなんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

先ほどまでの激昂はどこへやら。今ではその顔にある笑みは嘲笑のみ。

「えー、織斑くん。今からでも遅くないよ？ セシリ亞に言つて、ハンデ付けてもらつたら？」

「男が一度言いだした事を覆せるか。ハンデはなくていい

良く言つた。

それでこそ、俺が守るに値する人間だ。信念が、心が弱い奴なんて俺は興味ね。

俺が興味がある奴は、ただ心に芯がある奴だけだ。

「えー？ それは代表候補生を舐め過ぎだよ。それとも、知らないの？」

「まア待てよ」

一夏に話しかけている女生徒の話に無理矢理加わる。

今の一夏は戦況がアウエイ過ぎて自信を無くしている。ならば俺がアイツのホームになろう。

「舐めてんのはテメエらだよ。さつきの時間、一夏が言つた言葉を忘れたのか？」

「秋人？」

「さつきの……時間？」

「イツらはこの十数年間で植えつけられた固定概念に縛られてい る。

それは仕方ないことだ。一人の天才によってそうなるように誘導されたのだから。

だが、その時代ももう終いだ。その概念は既に不要で、壊さなくてはならない不純物にすぎない。

「一夏は入試を突破したって言つたんだぞ？ それはつまり教官を倒したことだ。もつと言い変えてみれば、このクラスにいる生徒の中で教官を倒していない奴らは男性である一夏よりも弱いってことだ」

俺の言葉を聞いてその女生徒は眼を見開く。

「さて、改めて聞こうか。この教室にいる生徒が何人入試を突破したかどうかを。まさか一夏にあれだけ嘲笑を向けておいて、オルコット以外は誰一人突破してないなんてないよなア？」

悪魔の笑みを浮かべながら、俺はクラス内にそう問い合わせた。返つて來るのは沈黙のみ。やはり突破したのは一夏とオルコットだけか。

「おいおい……。まさか自分のことを 「御堂、そこまでだ」 ……はいよ」

流石にこれ以上はアウトっていうワケか。

まあ俺自身まだ時期尚早だと思っていたし、止めるタイミングを

作ってくれて有難かつた。

「少し言い過ぎた、スマンかつた。だが、あまり俺の前で一夏を侮辱しないでくれよ？ 折角俺達はここに勉強しに来てんだ。そんなツマラン侮辱で俺は良いとしても、一夏はそういう空気に慣れてねえんだ。楽しい学園生活をそんな暗い雰囲気で過ごすのもあれだろ？」

「…………」「」

自分達の行いを思いだし、悔いているのか。誰一人として声を發せず、ただ沈黙の実が教室内を支配する。

俺が言い過ぎたのも、まア認める。だが、アチラさんが向けていた笑みも簡単に許せるものでもない。

「……ゴメンね、織斑くん。ちょっと言つ過ぎちゃつた」

「私も謝る。そうだよね、織斑くんは入試を突破してるんだつけ。そう考えたら私達何も言えないや」

「い、いや。俺は全然気にしてねえから！ 他の人達もそつだし！」

口々にクラスメイト達は一夏に謝り、それをオロオロしながら返答する一夏。

ちよつと言つ過ぎた氣もしたが、これであまり一夏が舐められることもなくなつただろう。その代償として俺の評判が落ちようと氣にしない。

「御堂くんもゴメンね？ そういえばそつだよね。御堂くんは織斑くんが学校に来たからここに来たんだし。楽しみにしてた友達が侮辱されれば怒るよね。ああ、何でこうも頭が回らないかな、私……」

あ、あれ？

「ゴメン。私も自分本位で相手の気持ちなんて何にも考えてなかつた……」

どうしてこうなった？

もつとこ、一夏が持ち上げられて俺が嫌われるみたいな未来を想像してたのに、全く違うんだけど？

別に好かれるのが嫌だというわけでもないが、こつまで自身の想像に裏切られると調子が狂う。

「……別に俺も言い過ぎたと思ってるから御相子だ。それでいいだろ？ 両方が謝ったんだ。後は禍根なんか残さず楽しもオゼ？ 折角の学園で一緒にクラスなんだ。暗い感情より明るい感情の方がいいだろ」

俺は顔を背けながら口早に話す。

その光景を千さんとまー姉が微笑ましい表情で見ているのを窺える。

……こつのは俺のキャラじやねエ。普段をしない事をしたもんだから無駄に恥ずかしい。

あれだ、あれ。いつも裏に潜つて腹の探り合いなんかをしてるもんだから、こんな純粋無垢な感情を向けられたらどう対応すればいいか全くわからん。

「……わたくしも一応ですけど謝つておきますわ。正々堂々を模範とする筈が、いつのまにか侮辱してしまつて……。本当にごめんなさい」

「いや、俺達も言い過ぎたぞ。な、秋人？」

「あア。こちらも一応謝つておく。が、さつきの言葉が俺の本心だ

ということも忘れるなよ？」

「ええ、肝に銘じておきますわ」

……ほオ？　IJの短時間で瞳の色を変えるか。

思った以上に素質はあるのかもな。驕っていた雰囲気が消え、これが本来のセシリ亞・オルコットの在り方なのかもしれない。

「もう一度、貴方達の御名前を教えて貰つてもよろしいかしら？」

「織斑一夏、よろしく」

「御堂秋人だ」

先ほどまでの険悪の雰囲気は消え去り、今では仲の良い級友のような雰囲気に変わる。

だが、一番言い表すのに適しているのは“ライバル”かもしれない。オルコット　いや、セシリ亞の瞳に宿る光は仄かな意思が宿つていた。

「さて、話は纏まつたな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナ行つ。織斑とオルコットはそれぞれ用意しておくよつに。それでは授業を始める」

先ほどまでの授業とは打つて変わり、一夏は真剣に授業に取り組む意思が見られる。

それはクラス全体にも言えることで、先ほどのやり取りが功を奏したようだ。IJS学園に入学できたということでふぬけていた精神に一括を入れる起爆剤のような役割を果たす。

「さて、一夏はこの最初の試練を乗り越えることが出来るかな？」

覚えることは大量にあるだろうが、そこは俺がそれとなくフォロ

ー してやるつ。

それが此処に於ける俺の役割なのだから。

6・昔馳染み（前書き）

この作品は原作「インフィニシティ・ストラタス」（インフィニシティ・ストラタス）の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

6・昔馴染み

終業の合図であるチャイムが大きく鳴り響く。それは放課後の開始の合図でもあった。

根本的に俺がこの学園で学ぶことなどある筈もないが、一応は眞面目に受けているという態度が必要だ。下手に余裕な態度であれば周りから怪しまれる。それ以上に千さんから怒られるだろ？し、まー姉にも小言を言われるのは確実。

そんな中、横に座っている一夏は机に突っ伏し、言葉にならない呻き声を発していた。

それを助けようとした瞬間に携帯のバイブレーション。滅多に使われる」とのないそれが自己主張を始めた。

「……ふうん。ま、気になるだろ？わな

「どうか、したのか？」

「N食者のよひにP口ヨロとこちらを見上げる一夏。

「いや、少し用事が出来た。夜になつたら勉強みてやるからそれまでは一人で頑張ってくれ！」

「あ？ 何言って

「アデュー？」

俺は一夏が何か言つ前にその場から姿を消す。姿を消すといつても、一夏が何かを言つ前に逃げただけだ。

そのまま携帯に連絡を入れてきた主の元へと向かう。向かう場所はこの学園に存在する当直室の在る一室。

出来るだけ目立たないよう、話しかけられても先生に呼ばれて

る等の言い訳を駆使し、その場所へと向かつた。

そこに辿り着けば、社会のマナーであるうノックを数回。

「あ、開いてますよー」

声の主は、俺の一一番最初の幼馴染。歳は離れているが、親の繋がりで知り合つたドジつ娘で、それでいて優しな姉貴分。

「久しぶりだな、まー姉」

「それはこちらのセリフです。本当に吃驚しましたよ？ まさかあーくんがエスを扱えるようになつていていたなんて知りませんでしたし」「そりや言つてなかつたし、言つてたら言つてたらで面倒事になつたろ？」

「それはそうですけど……」

最後に逢つた頃から面影は変わりない。ちょっとだけ身長が伸びたまー姉。

その癖して女性の象徴である部分は大分と発達したようだ。何て言つがアンバランスだな、おい。

そんな俺の視線を気付かないのか、未だにまー姉は恨めしそうな表情でこちらを見る。

「何時からなんですか？」

「ん~、まー姉が候補生になつた後くらいか？ てか、今はプライベートの時間だろ？ 敬語崩して普通に話しても大丈夫だつて。敬語で話されると背筋がムズムズしてしゃねエ」

「ふふつ、変わらないね、あーくんは」

「そりそり人間つてのは変わんねエもんだよ」

「そり？ 私は結構自分が変わつたと思つてるけど……」

「それは単なる自意識過剰なだけ。久しぶりに見たが、俺からしてみれば昔からのドジつ娘と何ら変わつてねエよ」

「あー、酷いなあ～」

ゆつたりとした雰囲気がその空間に醸し出される。

「にしてもまー姉がＩＳ学園の教師たア……、人は見掛けによらないモノだな？ あんなにおつちょこちょいだつたまー姉が人にモノを教えるようになるなんて」

「これでも努力はしたからねえ。それにしても驚きだつたなあ。まさかあーくんがＩＳ学園に入学してたのもそうだけど、織斑くんと同様でＩＳを動かせるなんて」

「それも右往左往した結果だつたけどな。千さん あー、千冬さ

んが色々世話焼いてくれなかつたら今頃一夏みたいな状態だつたかも」
「そういうえば織斑先生とは知り合いなの？ 織斑先生は昔馴染みつて言つてたけど……」

当直室に設置されている簡易台所でお茶を沸かし、盆に乗せて運んでくれる。勿論、その上には茶菓子もセット。

落ち着く緑茶の香りが部屋に漂い、甘い羊羹の匂いに非常にマッチする。

羊羹は有名老舗の奴か？ 緑茶も高級玉露だし……。流石は最先端の国営学園の教師。給料も半端ねエな。

「千さんとはもう長い付き合いだな。てか、千さんの家つて俺達が住んでた家の近所つて知つてたか？」

「ほ、本当に……？」

「あア。元々、千さんと知り合いになつたんじやなくともう一人のツレの親友が千さんだつたから知り合いになつたんだがな。俺はそ

のツレの友達で顔合わせしたってワケ

「へえ……」

「これは嘘ではない。その昔、俺は東さんに俺の家を強襲され、それからなんやかんやあり千さんとも知り合いになつたのだ。

しかしあの時は自分でも笑うくらいに驚いたもんだ。急に眼前に世界を動かした天才が現れたんだからな。しかもその第一声が『友達になろうＺＥ！』だつたし。流石の俺も呆然としたさ。

「ま、それ関係でＩＳに触れて、まさかの機動成功。まあ面倒事に巻き込まれること確定だつたからその事実は隠蔽されたんだが、織斑くんもあーくんと同様に機動に成功してしまつた」

「後は想像通り、千さんに頼まれて表舞台に出てきたつてワケだな」

説明はこんなもんで大丈夫だろ。

“嘘”は言つてない。だが真実を全て話したわけでもない。真実を少し隠し、それでいて真実を“暈し”て“脚色”しただけ。

本当に嘘つきは本当にことに少しだけ嘘を混ぜる者を言つらしげ、それだとバレた時が面倒だし言い訳が効かないし? なら真実をちょっと変えてやればいい。これなら言い訳もやりやすいし、純粹で素直なまー姉は騙してくれる。

「結構苦労したんだね……」

しみじみと語り、何故か俺の頭を撫で出す。

撫つたかったので俺は無理矢理振りほどく。この歳でそんなことをやられると恥ずかしいっていつ思春期の男子の心情を理解……してねエだらうなア。

溜息を吐きながら、俺は最後にまー姉に問いかけた。

「聞きたかったことこれだけ？ これだけだつたらさつと一夏んとこ戻つて手助けしてやんね」といけないんだが。千せんに無茶ぶりな課題を出されたしな」

「うーん、本当はもう少し話したかつたけど今日のところはこよ。また今度時間が取れたら、ね？」

「はいはいと。一応まー姉は俺の最初の幼馴染だからな。ぞんざいに扱つたりはしねよ」

「もう……。私がお姉ちゃんなんだからね？」

腰を当ててパンパンと怒る姿を見て、誰がまー姉を年上と判断出来るだろ？

「わかつてゐつて」

立ちあがりついでにまー姉の頭をくしゃくしゃと撫でてやる。それで機嫌が直るのは昔から一緒に今も変わりないだろ？

「わわわつー？」

「んじやな。明日の授業も頑張つてやれよ？」

俺はやつぱり残し、まー姉の当直室から姿を消した。

俺はまー姉と別れた後、すぐに自身に割り当てられた寮部屋へと向かう。

殆どの部屋が相部屋の中、俺や一夏だけが特別で個室……なんてことがあるわけなく、誰もが予想できる通り一夏との相部屋だ。時刻はそろそろ夕焼けが落ちる頃。夕食にはまだ早く、かといって遊びに行くには遅すぎるそんな時間帯。

どこかしに女子、女子、女子の空間は正直息がつまりそう。何処に行こうと好奇の視線が絶えない。若干鬱陶しいとすら感じてしまうほどだ。

声を掛けられようが少しだけ対応し、即座に離脱。こんなところで捕まつてしまえば寝るまで話されない。下手すれば寝ずに徹夜口一ス直行かも。

曲がり角を曲がり終え、それで尚一一番奥の部屋。そこが俺と一夏に割り当てられた部屋だ。

「お～す。頑張ってるか つて、お邪魔中だつたか？」

自分の部屋に入った瞬間、目に入った光景は一組の男女。別に男女の営みをしてただとか、情事の真つ最中だつただとか、合体中だつただとかではない。ただ一組の男女が向かい合つて座つていただけ。

卓上には飲み物と筆記用具。それから辞書相当の本が数冊積まれ、男子の方が生徒で、女子の方がそんな男子の教師役。つまりは勉強会の真つ最中だつたつてワケだ。

「お、お前は……」

そう言って女子 篠ノ之箒はこちらを見て眼を剥ぐ。

「あれ、秋人。お前夜まで帰つて来なかつたんじやないのか？」

顔を上げそつまつ男子は俺の友達である一夏。

「なに、お前の勉強の方が心配で早めに切り上げてきたワケだが、成程……。篠ノ之よ、やっぱり俺はちょっと出掛けてきた方がいい

か？」

「な、何を言つてゐるつー？」

「いやだつて。折角の昔馴染みが苦労してゐる所を助けてやつてゐるワケだろ？ ならその役目を奪い取つちゃ俺は悪者じやねエか」「何言つてんだ？」

一夏は俺の言葉を本当に理解しておらず、当の本人である篠ノ之は顔を真つ赤にさせ口をパクパクさせていた。
初々しい反応は好感が持てる。しかし馬鹿の天然具合にや辟易とされるね。

「ま、出て行く出で行かないにしてもまずは自己紹介と行こうか。俺は御堂秋人だ。気軽に呼んでくれ」

「……篠ノ之篠だ」

「女の子に向かつてすぐ」¹お前で呼ぶにや抵抗があるだらつから篠ノ之と呼ばして貰つか

「……好きにしろ」

ぶすつとした表情で、どこか怒つてゐる雰囲気を漂わせている。
やつぱり俺はお邪魔無視つぽいねエ。そんな邂逅が篠ノ之との出会いだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6737q/>

IS（インフィニット・ストラatos）“銃神が垣間見る未来（さき）”
2011年4月1日19時02分発行